

## 35. 七 釜 鐘 乳 洞

地 域	西彼杵郡西海町中浦郷
交 通	長崎バス 外海線、鐘乳洞入口下車
地形図	蛸ノ浦 (1/50,000), 面高 (1/25,000)

七釜鐘乳洞は、天然記念物（昭和11年12月8日指定）の清水洞をはじめ、中浦一帯にある多くの横穴やたて穴の総称である。この地域の地質は西彼杵層群とよばれる第三紀の海成層であり、とくにおびただしい量の石灰藻の化石を含んだ石灰質砂岩で特徴づけられる七釜砂岩層（崎戸・大島における徳万砂岩層）の中に、鐘乳洞やドリーネなどの石灰岩地形がつくられている。日本各地の多くの鐘乳洞が、古生層中の石灰岩地帯に発達しているのと比べ、母岩の地質時代が第三紀である点は、全く特異な存在であるといつてよい。

鐘乳洞入口のバス停留所のそばには、上下2層に識別される石灰質砂岩が露出し、北西に18°傾斜する。下部には白色の斑紋が見られるが、これが石灰藻の化石で、七釜砂岩層の典型的な性質が、この露頭にあらわれていると理解してさしつかえない。

歩いて10分たらずで清水洞の案内所の前に着く。洞内は非常に狭い所が多く、また足首まで水につかる所もあるので、案内所でぞうりを借り、軽装で入るのがよい。しかし、奥の方まで探ろうとするならば、時間も長くかかり、身体も冷えてくるので、夏でも長そでのシャツを着る位の用意が必要である。もちろん、自然保護の立場から、採集用具は絶対に持たないようにしたい。

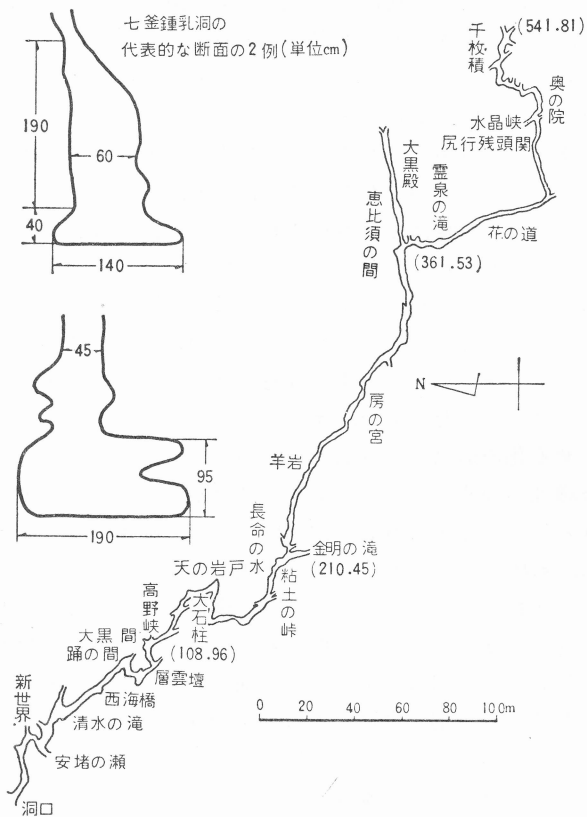
清水洞の洞内には、直線的な細長い通路が多く、とくに奥に進むほど、その原形がよく保存されている。花の道や大黒殿はその好例である。この直線的な通路の発達は、砂岩層中に生じた直交する2

方向の亀裂系に支配されたもので、およそ南北性のものと、東西性のものがある。大きな亀裂の交差する所では、岩石の崩落もしやすかったろうから、洞穴は余計に拡大される。踊の間、大黒の間、恵比須の間がその例である。そこで、この広間に入ったあと、通ってきた通路に対し直角にまがると、再び1人がやっと通り抜けられる位の細長い直線的通路をたどることになる。

鐘乳洞の最大の特徴である鐘乳石の発達は、ここでは余りよくない。母岩そのものが純度の高い石灰岩ではないためである。しかし、規模は小さいが、大石柱とよばれる石柱、金明の滝の鐘乳石やリムストーン、親子地蔵とよばれる双頭の石筍などは、普通の鐘乳洞と同じように発達している。また砂岩より析出した石灰華が、垂直に立った洞壁の全面をおおい、まるで石の花を咲かせたような感じをいだかせる花の道は、清水洞内の見所の一つであろう。

七釜鐘乳洞の成因は、一次的には地下水流が地層の亀裂中を流動するうちに石灰分を溶解し、洞穴内の通路を拡大したものであろう。とくに、石灰藻化石が厚く層状に密集した部分では、幅も広がっているのが普通である。二次的には、機械的な浸食作用が考えられる。それは、地表で西彼杵層群をおおっている玄武岩の転石が、砂岩の亀裂を通して洞穴に落ち込み、地下水流の豊富な時に通路の底を転動して、研磨剤の役目を果して下刻浸食を行なっていることである。洞内を歩くと、足もとに川原の砂利のように、まっ黒い玄武岩の円れきが転がっていることに気づくことであろう。また最も奥の千枚積では、砂岩の亀裂の中に玄武岩の巨れきが落込んでいるのが見られよう。

面白いことに、玄武岩の転石が低い段丘れき層をつくっている部分がある。れきの間には粘土がつまり、さらに石灰分により固められている。浸食の回春をしめす貴重な地質現象である。また霊泉の滝の奥には、洞床の砂岩におう穴が見られる。ここでも地下水流の浸食作用の営みを知ることができる。 (鎌田泰彦)



天然記念物七釜鍾乳洞(清水洞) 昭和35年11月測量 鎌田泰彦(長崎大学)